支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「キセル」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

昔の煙の風景のひとつに、キセルがありました。祖父がよくふかしていました。燃え終わりそうになると、そのきざみ煙草（銘柄は〝ききょう〟、これしかなかったような気がします）の塊を次の火種にするため、今吸っているものを自分の左の手のひらに、ぽろっと吹き出し、右手でキセルを持ちながら先端にきざみ煙草を詰めるのです。その間左の手のひらには火種が乗ったままで、たまに思い出したように転がしていました。

私は人間の手のひらに火種があり、そこから煙が立っているのが、何とも不思議に眺めていたものでした。そのくらい百姓の手の皮は厚いものだったのです。

屋敷内作業の休憩では、いちいち作業靴を脱がずに火を囲んで休めるようにわが家では、ドラム缶を輪切りにして作った、いわば移動式の囲炉裏がありました。その周りで祖父や父はキセルをふかしていました。

そこで疑問になるのが、ヤニのたまったキセルの掃除はどうしたかということです。

稲わらをむいていくと硬く細い芯になります。これを「わらみご」といいます。その先には、穂が付いていたふさふさの部分がありますから、わらみごは細い小さな箒（ほうき）状になります。

これをキセル本体より長く切り、キセルを掃除するわけです。一本の硬いわらみごをキセルの吸い口穴からゆっくり入れます。急ぐと折れてしまいます。入れ続けるとキセルの先っぽから、わらみごの先端が出てきます。その先っぽは当然ヤニで黒くなっていて、手でつかむわけにもいきませんから、踵（かかと）で踏んづけてキセルを引っ張り上げます。そして、わらみごのふさふさがキセルの内側のヤニをしっかり拭いとってくれるわけです。

こうしてきれいになったキセルを、「ふっ」「ふっ」と二度ほど空吹きし貫通を確認します。最後に黒くなったわらみごを囲炉裏の火に突っ込めば終了です。

私はその煙を見ながら、キセルをふかしたいとは思いませんでしたが、一度あのキセル掃除をしてみたいものだとはよく考えていました。

こんな風景も紙巻き煙草の普及とともに、消えていきました。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める